

三一新書 648

# 戦争と人間

11

劫火の狩人 第三部

五味川純平 著



三一書房

## 五味川純平

ごみかわじゆんべい

- 1916年 満洲に生まれる  
東京外語英文科卒  
満洲にて就職、応召
- 1948年 引揚げ
- 著書 『人間の條件』『自由との契約』  
『歴史の実験』『孤独の賭け』  
『アスファルト・ジャングル』  
いずれも三一新書
- 現住所 東京都渋谷区神宮前1-15-3

戦争と人間 11

定価 300 円

---

1969年4月15日 第1版発行

著者 © 五味川純平  
1969年  
発行者 竹村 一  
印刷所 暁印刷株式会社  
製本所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9  
電話東京(291)3131~5番  
振替東京84160番  
郵便番号 101

---

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 648

戦 争 と 人 間

11

劫 火 の 狩 人

第 三 部

五 味 川 純 平 著

三 一 書 房



戦争と人間



劫火の狩人 第三部





その日は俊介にとって出来事の多い日であった。

昼休みになると、社員たちは、男も女も屋上に出て、十二月の鈍い陽を浴びた。人の輪が幾つか出来て、バレーの球を上げ合うのも毎日のことである。

俊介は同僚とおそく上って来、球戯の輪に入るでもなく、傍らに佇んでいた。同僚といっても、社員歴は俊介よりずっと古い。

その男がこう云った。

「提灯行列、お宅のあたりどうでした？」

「……ええ」

俊介は漠然と答えた。

「南京が陥ちたから、支那は手を上げるでしょうな」

「……さあ、首都はいくらでも遷都できますからね」

「手を上げないとする、今度はどこですか。武漢ですかね。武漢が陥ちたら、いくらなんでも降伏するでしょう」

「さあ……しないと思いますよ」

俊介は球の動きを眼で追っていた。

「戦鬪に勝つのと戦争に勝つのは別事でしょう」

「……しかし、いつでしたか、太田大蔵次官が云ってましたよ。戦費四百億に充分耐えられるそうですね」

「僕は金のことは知りません。僕が扱っているのは物資の数字ですから。資金が仮りに集っても、物が出来な  
いってことがあるでしょう。満洲にあわてて重工業を開発しても、計画どおりに行くとは思えません。日本の産  
業は大きな戦争がやれるようには出来ていないんじゃないですか」

「……そうでしょうかねえ」

バレーの輪のなかから一人の男が上げた球が、見当が狂って、俊介の方へ飛んで来た。

俊介は跳ね上って打ち返した。そう強く叩いたつもりはなかったし、たまたま輪のなかにいた兄英介の秘書を  
狙ったわけでもなかったが、球は急角度に切れこんでそこを襲った。小谷京子は受けそくなって尻餅をつき、太  
腿の奥まで覗かせてあられもない恰好になった。

「満開だー」

男のだけかが囁し立てて、笑いが爆発した。

「厭だわ」

小谷京子は顔を赤くして立ち上ると、人なつこい笑顔で俊介を睨んだ。大柄で、ゆで卵をむいたようなつやつ  
やした肌が人目を惹く娘である。

「……彼女は、あんたが上京される前にはうちの課にいたんですがね」

同僚が俊介に云った。

「部長に引き抜かれて秘書になったんです。お気に入りですよ、部長の」

「……そうですか」

俊介は小谷京子の方を見た。娘は恵まれた体を躍動させて、球戯に興じていた。

退けどき間ぎわに、女事務員が俊介のところに来て、

「御面会の方です。名前はおっしゃいませんの。廊下で待っていらっしやいます」と云った。

俊介が部屋を出ると、廊下の端に耕平が立っていた。

そこまで俊介が行く間に、別の部屋から小谷京子が出て来て、昼よりもさらに打ちとけた笑顔を見せた。すれちがうときに、女の体から香料の甘い匂いがした。安物らしいが、悪くない。その匂いが女の肌から分泌されているような、ちょっととした錯覚があった。

耕平は逞しい体に似合わず顔色がすぐれなかった。伍代家を出てから、食事も不規則になっているにちがいない。

俊介は先に立って、地階で喫茶店を兼ねている食堂へ降りて行った。時間はずれで、店内は閑散としていた。

「……実は順子よろこさんのことだがね」

と、耕平が俊介の方へ額を寄せて云いだした。

「暫く僕に近づかないようにしてくれる方がいいと思う。どうも情勢が切迫して来たようなんだ。手紙もくれない方がいいな」

「どうした？」

「……昨日の朝、労農派の一斉検挙があったらしいんだ」

俊介は耕平を見つめて、耕平の口が動くのを待っていた。

「……奴らの狙いは、人民戦線運動を上から下まで根こそぎに潰すことなんだ」  
耕平が呟いた。

「労農派が検挙されたとなれば、労農派の学者や評論家と“唯研”の幹部とは、置かれている状況においてちがいはないからね、唯研の検挙は近いものと思わなくちゃならない。……俺たち学生は、そりゃ中には上部組織に直結している者もいるだろうけど、大体において自主的に運動の末流に加わっているだけでね、労農派の指令を受けているわけでも、唯研のメンバーであるわけでもない。しかし、俺たちが自主的にRSを持つということ、反戦啓蒙と理論的研修が目的だからね、合法を擬装しているたとえば唯研の秘密グループ活動と方法において変りはないわけだ。指導者たちがやられると、それにつながるのある学生や積極分子がやられ、俺たち雑魚もやられる……俺は、もう、時間の問題だと思っている……」

耕平には冷めた定食が、俊介には珈琲が来た。

珈琲は出がらしがぬるくなったようで、不味いことこの上なかった。

耕平は黙々と食いだした。

労農派の一斉検挙は、国民が南京陥落で戦勝気分浸っている最中、昭和十二年十二月十五日、午前六時を期して全国一斉に疾風迅雷的に行なわれた。警視庁管区で百七名、その他各府県で二百余名が検挙され、山川均・大森義太郎・向坂逸郎・猪俣津南雄・鈴木茂三郎・荒畑寒村・加藤勘十・黒田寿男ら学者・評論家・代議士などが含まれていて『反ファシズム人民戦線』にとっては量的にも質的にも致命的な打撃であった。

当局は一週間後に、こう発表した。

「……本年七月支那事変勃発以来この我国重大時局に際し、コミンテルンの指示せる方針と同様なる方法を以て反戦思想の流布宣伝に努め……積極的に人民戦線運動を展開すべく虎視眈々として待機しをるの状況である。

……時局は極めて重大にして、これが時難克服のため挙国一致朝野挙げて邁進せねばならぬ時である、かかる際これ等一派の策動は国際的にも国内的にも極めて重大なる影響を及ぼすので……これ等の中心分子に対し国体を変革し私有財産制度を否認するの治安維持法違反被疑事件として断乎検挙取締を加へるとともに一方日本無産党並に日本労働組合全国評議会の各結社に対して結社禁止を命じて今後の活動を禁止した……コミンテルンが反ファシズム人民戦線の樹立および合法運動の擬装ならびに利用等の新運動方針を採用してから、すべての共産主義者は極力社会民主主義団体乃至は自由主義団体に潜入し、もしくはその運動を利用すべく努めているので、警察の取締乃至警戒の範囲も、勢ひこれらの団体にまでおよぼして行かねばならぬ情勢となつて来た……今や、民主主義、自由主義等の思想は、共産主義思想発生の温床となる危険性が多分にある……」(註一)(傍点作者)

これは、検挙されずに残っている反ファシズム・反戦主義者に対する明らかな脅迫であった。検挙の範囲を途方もなく拡大するぞと予告しているのである。意識的な青年たちは、しかし、当局のこの発表のずっと以前から、当局の企図を予測して神経を尖らせていたのである。

「……おそらくね、今後一年以内に、反戦的な動きのある者は勿論、そうなる可能性のある者にまで殲滅的な弾圧が及ぶだろう」

耕平が驚くべき早さで定食を平らげて云った。

「……俺は、みっともない話だが、内心は慄えているんだよ。特高の弾圧の予備知識があるばかりにね、いつ来るかいつ来るかと思つて。本をこそそ匿してまわったり、今夜読む本を明日に備えてどうしようかと思つたり。……活動らしい活動をしているという自負心があれば、まだ気が楽だろう。それが無いんだ、情ないことだね。RSを幾つか持つて、何かしているような気になつてただけだ。しかし、来るものは来る。こっちの運動は未熟でひよわでも、強権の側は用意万端ととのつてゐる。いつかも君に云つたが、弾圧の方針が昔とはちがうんだ。昔のように活動そのものが問題になるだけじゃない。傾向が問われるんだ。戦争はもう俺たちの日常生活を隙間なく占領したよ。……順子さんによくわかるように説明してほしいんだ。うっかりして、あらぬ疑をかけさせたくない」

「……順子は君のどこに行つてたのか？」

俊介が、さっきからほとんど瞬きもせずについて、口調はきわめて静かにきいた。

「たまにね……」

「どう思つてる？」

「好きだよ」

耕平がためらわずに答えた。

「しかし、好きだからつて、それ以上のことは考えないよ。考えたつてどうにもならんことだ」

「……女は、もし恋愛感情を持ったら、どうにもならんとは思いたがらないよ。どうにかなるように自分を変えようとするだろう」

「しかし、俺たちの未来がどんなものか、君も大体想像がつかうだろう？……正直云って、俺もね、君の家に甘えていたころ、一人前になったら順子さんと結婚したいなどと空想したものだった。しかし、空想は空想でしかない。戦争で資本主義の矛盾が激発して内乱になるなどと云っている仲間もいるけどね、俺はそんなに楽観はしていない。仮りに娑婆にいられるとしても、直ぐに軍隊だ、戦場だ。どっちみち、弾丸にあたって死ぬか、陸軍刑務所行きだろう」

「……標しめざがこう云ったと俺が云えば、順子は君の真意を確かめに行くだろうな」

「来させないでくれ。頼むから。順子ちゃんはまだ何も知らんのだ。特高がやる気になったらどんなことをするかも、知らんのだ」

特高の拷問は音に聞えている。疑いだしたら見境なしである。女の恥部に侮辱と苦痛を加えることぐらい、やりかねないのだ。標耕平は脇坂晴恵から聞いてよく知っている。検挙されたら拷問は必至と覚悟している。伍代順子は、しかし、まだ何も知らない。

「……君の気持は伝えるがね、君が順子のことには気がつかうことはないよ」

どやどやと人が入って来た。会社が退けたのだ。俊介を見て会釈をする者が多かった。

俊介は伝票を取って立とうとした。

その手を耕平が押えた。

「……君も注意してくれよ。君は大丈夫だろうけど……」

俊介が坐り直して、小さく顔を振った。

「……ブルの息子だからか。ところが、これで大丈夫でないかもしれないのだ。網の広さと目のこまかさによるがね」

「……どうして？」

「俺が何もしていないのは君以下だが、あっちにいたときのことで、何か起こるかもしれない」  
「どんな？」

答える前に、俊介の記憶を異国の街の風景が掠め、否応なしに女によって彩られる青春の断片が貫いた。

——思想問題で俺などを追及するとしたら滑稽なことだ。俺が何を求めたかといえば、女がもたらすであろう何物かを妄想してさ迷ったにすぎないのだから——

「……今年の四月、俺がまだあっちにいた時分に、コミンテルンの対満陰謀という名目で大検挙があった。四百八十何名だか検挙された。いまごろは、もう、死刑になった者がたくさんいるだろう。ほとんどが北鉄に關係のあった満人だからね、容赦なしだ。……これと関連があるかどうか知らんが、クドリヤツェフというロシア人がせんだって検挙されたらしい。諜報員としてだ。同姓異人でないとすれば、この男と僕は数回会ってるんだ。学生のころからと、出てからもね。気のいい中年の男だった。やさしいところがあってね。貧しい白系ロシア人の青年に学費を出してやったりしていた。デカや憲兵はそんなことも諜報活動の手段だというだろうがね。俺はその男のやさしい反面づけつけ云うところが好きだったな。日本の満洲経営のやり方を、こう云うんだよ。追剥が大金を捲き上げておいて、被害者に電車賃だけ恵んでやるやり方と同じだって。俺も全く同意見だったからな」



「わざと反目的なことを云って、スパイならそんな態度は見せないという常識の逆を行ったんだらうか？」

「……そうは思えないな。他の人にはそんなことを云ったりしなかったらう……」

——クドリヤツェフが俺に対して率直だったのは、俺がタマーラ・ボグダーノワという女と親密だったことを知ったからだ。——

俊介はそれは云わなかった。

「……何か特別なこと、知りたがっていた？」

「投資先を考慮している商人だとしたら当然なことだがね、満洲の産業開発の具体的なことを知りたがっていたといえはいえる」

「教えた？」

「あいにく俺は学生上りでね、大したことを知らんのだ。予想としてはこうだということは、俺なりに持っていたがね」

「……その人物、ただの商人だと思ったかね、それとも……」

俊介は顔をゆっくり振った。

「その男の職業が何であろうと、俺には問題ではなかった。他国の土地を仮想敵に対する戦略基地として壟断する犯罪性に較べれば、その男が何をしようが、俺には問題ではなかった」

俊介が耕平から視線をはずすと、そこには焦点がなくなった。いちどきに過去の全部を思い起こしているようであった。

「……クドリヤツェフが捕まって、どこまで口を割るか知らんが、俺も安全とはいえないだらうな……」